

論文

類義複合動詞の用法一考

——日本語教育の視点から——

田 中 衛 子

要 旨

種々の調査によると、現代・古代を問わず、日本語の語意の中で多い品詞は動詞である。その動詞の現代語のものを、単純動詞と複合動詞に分けて集計すると、単純動詞の数のほうがやや多いものの、複合動詞もそれに迫る数だということである。つまり、日本語の中では、それほど複合動詞が使用されているのである。

ところが、日本語を外国語として、または第二言語として習得しようとする人たちのための教科書には、単純動詞の意味や用法はあるが、複合動詞は、中級のものにもあまり記載されていない。従って、学習者は習得の機会がないわけである。これは、日本語を第二言語として使用しなければならない留学生たち、とくに大学で勉強する留学生たちにとって、一つの問題である。

それでも、複合動詞は日本人がよく使うところから、日本で生活するうちに、新聞・雑誌・テレビ番組などを通して、いくつかの複合動詞を習得することもある。その場合に問題となるのは、類義の複合動詞である。これらについて、教師が、質問を受けることも多い。

そこで本稿では、日本語の中で使用頻度が高い類義の複合動詞、中でも、後項動詞が類義の複合動詞で日常的によく使われる語を取り上げ、それらの意味と用法の分析を試みるものである。

キーワード：単純動詞，複合動詞，アスペクト，前項動詞と後項動詞，類義複合動詞

1. はじめに

日本語教育の中でも、特に、留学生の日本語教育では、学習者が日常会話ができるようにすればよいというわけではないことは、言うまでもない。特に、大学で学ぼうとする留学生や、現在、大学に在学中の留学生への教育では、高等教育を受けるために有用な日本語が身につくようにする必要がある。言語習得には、さまざまな要素があるが、まず必要なものは語彙であるのは、多くが認めるところである。

日本語の語彙の中で、大きい比率を占めているのは動詞である。国立国語研究所が行なった「現代雑誌90種の用字用語」の調査結果によると、「動詞、動詞類似の語」の割合は異なり語として11.4%、延べ語数としては23.6%である。この事実は、学習者たちが動詞を意識して身につけるべきことを示している。森田(1991)¹⁾が『例解国語辞典』を調査した結果によると、収録語の11.4%強が動詞で、そのうちの39.29%が複合動詞であるという。この事実は、我々が使用している現代日本語動詞の約40%が、複合動詞であることを示している。つまり、日本人がいかに多くの複合動詞を、日常的に使っているかということである。

上記の事実にも拘らず、日本語を第二言語として習得しようとする学習者のための教科書にさえ、複合動詞はあまり含まれていない。²⁾従って、上級段階に進んだ学習者でも、複合動詞に関する日本語力はあまり持っていないと言える。これは、日本語で高等教育を受けようとする、または、現に受けている留学生にとっての問題であり、留学生自身も口にするとところである。

こういう状況の中で、ある時、ある留学生から、類義の複合動詞についての質問をうけた。類義語の辞書を見ても、答えは得られなかったというのである。このことを受けて、本稿では日本語教育、つまり、日本語学習者への説明を念頭において、類義の複合動詞について検討を試みようとするものである。まずは、複合動詞というものについて見る。

2. 複合語と複合動詞

複合動詞も大きく分けると複合語に属する語である。複合語は派生語・置語などと共に合成語の範疇に入る語で、通常、2種の造成成分によって構成されている。この2種の結びつきは、その結びつき方によって従属関係と等位関係に分けられ従属関係はさらに次の三つに分けられる。³⁾ 1) 主述関係、2) 連体修飾関係、3) 連用修飾関係の三つである。1) は修飾要素と主要要素との関係が、文の主語と述語との関係のような結びつきである。2) は主要要素が体言的な要素のものであり、3) は主要要素が用言的な要素のものである。

つまり、2) は名詞との結びつきであり、3) は動詞との結びつきである。

複合語を品詞という面から見ると、分類は次のようになる。一言で言うと複合語の品詞は、前項の語の品詞に関わりなく、後項の語の品詞によって分類される。従って、前項が名詞や形容詞であっても、後項の語が動詞であれば、動詞として分類されるのである。

これらの複合語のうち、本稿で取り上げる複合動詞は、前項・後項共に動詞の結びつきによってできた複合動詞である。つまり、「動詞+動詞」（「動詞連用形+動詞」）の複合動詞ということである。そして、その中の山本（1983）の調査による後項動詞となることの多い語⁴⁾の上位から類義のを選び、それらが後項動詞となっている複合動詞の用法を比較・考察する。それらの語とは、1. ～ハジメル、3. ～ダス、6. ～カケル（数字は使用頻度の順位。～は前項動詞の存在を示す。）である。この3語は、いずれも「開始」の意味を持っている。「3.ダス」は元来「何かを外へ移動させる」という意味であり、「6.カケル」も「二つの物（人）をつなぐ」という意味であるが、本稿では「開始」の意味で取り上げる。

なお、「開始」と対応する「終了」を表す後項動詞を持つ類義の複合動詞も、本稿で取り上げることにしているが、上記の調査結果の10位以内には、「終了」の意味を持つ後項動詞として、7. ～アゲルと8. ～キルの2語がある。これらは本来は「終了」以外の意味を持つ語であるが、本稿では、「終了」の意味のみで考察する。「開始」の「～ハジメル」に対応する「終了」の「～オエル／～オ瓦尔」は、後項動詞として10位以内には入っていないが、本稿では「～ハジメル」に対応する語として取り上げる。（他動詞「はじめる」に対応する語は、文法的には「おえる」であるが、「おわる」を他動詞として使用する例もある⁵⁾ので併記した。）

因みに「～おえる（おわる）」は、森田（1991）が『例解国語辞典』に収載された動詞総計4,622語の中から取り出した後項動詞の上位25語⁶⁾にも入っていない。また、玉村（1885）が、『岩波国語辞典』から得た後項動詞の上位17語⁷⁾の中にもない。

本稿で考察しようとしている複合動詞は上記の6語であるが、これらのものが、各種の複合動詞の中でどの範疇に属するのかについて、次に記す。

3. 複合動詞の分類

複合動詞は、通常、前項部の動詞（V₁とする）と後項部の動詞（V₂とする）との意味や機能の関係から数種の型に分けられるが、その分け方には諸説がある。その中から、ここでは、本稿の目的とするところに関わりのある主な説を取り上げる。

まず、寺村（1984）⁸⁾は「三次的アスペクト」の中で、「動詞連用形+動詞」という形を四つのタイプに分けている。その際に、それぞれが単独で使われる時の意味、文法的特徴

が、複合体の中でも保持されているものをV, 単独の場合とは全く、あるいはかなり違って
いるものをvとして下のように表している。

(イ) V—V : 呼び入レル, 握リツプス, 殴リ殺ス, ネジ伏セル, 出迎エル, ……

(ロ) V—v : 降り始メル, 呼ビカケル, 思イ切ル, 泣キ出ス, ……

(ハ) v—V : サシ出ス, 振り向ク, 打チ樹テル, 引キ返ス, ……

(ニ) v—v : 払イ下ゲル, (話ヲ) 切り上ゲル, (仲ヲ) 取りモツ, (芸ヲ) 仕込ム,
トリナス, ……

上記の四つのうちで、本稿で取り上げようとしているのは、(ロ) の範疇に入るものである。寺村は、(ロ) の例のうち「泣キダス」と類似した「～ダス」を含む文を例示し、次のように分析している。

(例) a. 彼ハソノ虫ヲ箱カラツマミ出シタ。

b. 虎ガ檻カラ逃ゲ出シタ。

c. 赤ン坊ガ泣キダシタ。

(いずれも原文のまま)

a. b. c. は、一見いずれも同じ形の後項動詞を持っているが、寺村はa.のみを複合動詞の後項とし、b. c.の例の後項は補助動詞としている。その理由は、a.は「誰かが何かに働きかけて、それをどこかの外へ移動させる」という「出ス」の一つの仕方を表している。これはV1—V2の型の複合動詞だが、b. c.は「虎」や「赤ン坊」が、何かに働きかけて、それを外へ出した、という意味を含んでいない。従って、b. c.の「～ダス」は補助動詞だということである。この説によると、同じ(ロ)に例示されている「降り始メル」の「～始メル」は後項動詞ということになる。

姫野 (1999)⁹⁾ はこのことについて、「動詞と動詞の結合形式」の項で次のように述べている。

「動詞と動詞が結びつく形式には、二通りある。「て」の形に続くものと、(中略) 動詞の連用形に続くものである。(中略)「て」形に続く動詞類は、通常、その形式度の高さから「補助動詞」と呼ばれている。連用形に続く動詞類は、複合動詞の「後項動詞」と呼ばれることが多い。(中略) この本の中では、複合動詞については「後項動詞」とし、その中でも特に生産性の高いグループを接尾辞化したものと呼ぶことにする。(後略)」

この後、姫野は佐久間 (1966) の説¹⁰⁾ とその命名に触れ、また、前述した寺村の説にも言及しているが、自説としては「て」の形に続く「補助動詞」と、「複合動詞の後項動詞」という分類で取り上げている。

本稿では、動詞の「て」の形に動詞が続くという複合動詞は取り上げないので、基本的には、「補助動詞」についてはアスペクトの面から寺村の説に則ることになる。しかし、日

本語教育の場にこれを持ち出すと、説明を与えたとしても、学習者に運用以前の負担をかけるだけで、即運用につながらないと思われるので、対学習者という教育の面から考えて、本稿では寺村の言う「後項動詞」を「後項動詞1」とし、「補助動詞」を「後項動詞2」として書き進めることにする。

なお、ここで検討しようとしている寺村の(ロ)に属する複合動詞は、2.で記した1)主従関係、つまり、前項と後項の関係が文の主語と述語のような関係になるものである。そして、後項動詞となる動詞は、金田一(1950)の4分類、1.「状態動詞」、2.「継続動詞」、3.「瞬間動詞」、4.「第4種の動詞」に従って考察すると、2.と3.に属するものである。

4. 類義の後項動詞

表題として「類義複合動詞の用法」を出しているが、日本語の中にあるすべての「類義複合動詞」をここで分析・検討することはできないので、2.で記したように、「開始」の意味を持つ「～はじめる」「～だす」「～かける」と「終了」の意味を持つ「～おえる／～おわる」「～きる」「～あげる」を考える。3.の分類に従って分類すると、「～はじめる」と「～おえる／～おわる」は「後項動詞1」であり、「～だす」「～かける」と「～きる」「～あげる」は「後項動詞2」である。ここで再度簡単に記すと、「後項動詞1」はその動詞が本来持っている意味で使われるものであり、「後項動詞2」は本来の意味から派生した意味、つまり、転義で使われるものである。

このように、後項動詞「1」と「2」の区別はつけられるが、これを学習者に説明しても、学習者の疑問に答えたことにならないのは、言うまでもない。

4-1. 「～はじめる」「～だす」「～かける」

この三つの後項動詞は、「後項動詞1」と「後項動詞2」の違いはあるものの、同じ「開始」という意味を持つ語である。ただし、大きくは「開始」の意味を持つが、全面的に同じ用法を持つものなのかを、ここで検討してみる。

まず、辞書にある原義と転義の「開始」の意味の部分を見る。見るのは『広辞苑(第4版)』(「A」とする)と『岩波国語辞典(第4版)』(「B」とする)である。

「A」

1. はじめる(他下一)

これから順を追って展開する動作にとりかかる意。①開始する。

2. だす(他五)

(1) 内にもっているものを外へやる。①内から外に移す。

(5) (動詞の連用形について) ②その動作を始める意を表す。「走りだす」

3. かける (他下一)

(1) ある物・場所などに事物の一部をささえとめる。①物をつけてぶらさげる。

(9) (他の動詞の連用形について) 物事を始めた状況にあるの意を表す。

① ……しそうになる。……し始める。「日も暮れかける」

② ……し始めてその途中にある。「読みかけた本」

「B」

1. はじめる (下一他)

① 物事を新たに行なう。今までの、していない状態から、する状態に移す。

② <動詞や「(さ)せる」「(ら)れる」の連用形に付き、接尾語的に>新たにその動作を起こす。…しだす。…ことが始まる。「花が咲き始める」

2. だす (五他)

(1) (五他) ①内から外に移す。

(2) (五自) <動詞連用形を受けて>…し始める。「歩きだす」

3. かける (下一他)

(1) ある所に支えとめる。①物を動かして端(と見られる部分)を他の物の面や一点に(固定的に)とめる。

(4) <動詞の連用形、助動詞「(さ)せる」「(ら)れる」の連用形に付いて>物事を始めた状況にある。「観客が席を立ちかける」。まだし終えない状態にある。「読みかけた本」

辞書の内容を詳しく検索するのは本稿の目的ではないが、上記2種の意味・用法の説明について、少しふれておきたい。まず『広辞苑』だが、これは第4版なので、約16万5千項目が掲載されているにも拘らず、後項動詞としての「～はじまる」についての記載はない。これは本稿で言う「後項動詞I」という部類の語なので省かれたのであろうか。

また、「～かける」の転義として「A」「B」共に、「動詞の連用形について『物事を始めた状況にある』の意」という説明の後に、「A」は「日も暮れかける」、「B」は「観客が席を立ちかける」という例を出している。これらの例の「～かける」は、「物事を始めた状況」であろうか。「始める状況」なのではないだろうか。「～かける」のもう一つの用法では、「A」は②「…し始めてその途中にある」の例として「読みかけた本」を出し、「B」も(4)「まだし終えない状態にある」に「読みかけた本」を出している。これらは、その意味から考えても、「読みかける本」とはできないので、例としては正しい。しかし、この意味での用法としては、後項動詞は常に「～た」形であるということが付記してあるほうがよいと思われる。

ここまで見てきて考えられるのは、上記の3後項動詞のうち、類義語として意味が近いために使い分けがむずかしいのは、「～はじめる」と「～だす」である。そこで、この2語を特に比較し検討する。

4-1-1. 「～はじめる」「～だす」の分析

日本語教育を視野に入れて書かれたもののうちで、主なものを取り上げる。

寺村 (1984) は、「時間的相」の項で次のように記している。

「(前略) Vハジメルは、ほぼ、<Vすることを始める>という意味であるが、その「Vする」は自動詞でも他動詞でも、また意志動詞でも非意志動詞でもよい。Vの文法的性質が、Vハジメル全体の文法的性質を決定する。」

そして、次の例文をあげている。

- 1) 雪が降りハジメタ
- 2) 彼ラハ酒ヲ飲ミハジメタ

(以下例文の前の数字は筆者がつけたもの。原文とは異なる。)

つまり、1) の複合動詞「降りはじめる」は自動詞で、2) の「飲みはじめる」は他動詞だということである。他の例を考えてみても、これは、学習者にそのまま伝えてよい事項である。

次は「～だす」を見よう。寺村はこう書いている。

「(前略) ～ダスも同様で、ダスは移動を伴う働きかけを表わす他動詞であるが、開始を表わす～ダスは、自他、意志の有無の別なく使われ、それ全体の文法的性質は、Vのそれに一致する。」

例文としては「～はじめる」と同じ文を出している。

- 3) 雪が降りダシタ
- 4) 彼ラハ酒ヲ飲ミダシタ

ここまでの説明と例文を見ると「～はじめる」と「～だす」は、「開始」を表わす用法では、同じように使えるかのようなのであるが、違いが全くないわけではないとして、寺村はこう記している。

「～ハジメルは、一般に、笑ウ、泣ク、腹ガ立ツ、ムシャクシャスル、など、人の心身の動きで、反射的な、自分でコントロールできないようなものには使えないようである。」

「使えないようである」というのは、断言を避けているわけで、これが学習者への用法説明の際の問題となる部分である。使えない例として次の文をあげている。

- 5) 赤チャンガワット

泣キダシタ
泣キハジメタ

- 6) 私ガソウ言ウト, 先生ハ急ニ
 ┌ 笑イダシマシタ
 └ 笑イハジメマシタ

5) 6) 共に「～ハジメタ」のほうを不自然な文だとしているのだが、それぞれに、「ワット」と「急ニ」という副詞のあることが「反射的な動作」を強調することになり、不自然さを強めているのではないか。とすると、たとえこれらの副詞がなくても、「～はじめる」は、人が自分でコントロールすることがむずかしい感情を表わす複合動詞の後項動詞として使った場合、意味は理解されても、日本語として不自然だと言えるのではないか。そして、それはもともと、後項動詞として使われる「～はじめる」と「～だす」の間にアスペクトの相違があるからではないか。

これについて森田 (1977)¹¹⁾ は別の観点から次のように述べている。

「作用・行為の開始を表す語として「一出す」と同様に「一始める」も使われる。

雨が降り出す／降り始める 歩き出す／歩き始める
 桜が咲き出す／咲き始める 泣き出す／泣き始める

ほぼ同じ意に用いられるが、「一出す」は「考え出す、思い出す」のように、“事柄の発生、形成”の意のある点、「一始める」と異なる。「一出す」は無の状態、現れていない状態のものがおのずと顕在化し、動作・状態の変化として形をなすという気分が強い。“開始”よりは“新たな事態の成立”の意識が強い。だから、人間行為に使われても意志性がない。(後略)

この中で「気分」という語が使われていることは、前述の寺村の「使えないようである」と同様に、論理という点また学習者への説明という面からは気になるところだが、寺村は、森田の内容について「本質をついていると思う。」と支持している。

姫野は「開始の『～だす』」の項¹²⁾で、「～始める」と対照しつつ、次のように記している。箇条書きになっているので、その形で、本稿に必要な部分のみを引用する。

- 「(1) 感情の動きを表す(中略)ような語は「だす」のほうが適している。(中略)「不意に、急に、何かの拍子に、(中略)」のような修飾語を伴って突発性が強調されることが多い。
- (2) 不測性を強調する場合は、「だす」のほうが適している。(中略)逆に(中略)開始意識が強い場合は、「～始める」がふさわしい。
- (3) 音の自然発生を表す場合は、「だす」のほうが適している。
- (4) 「今にも～しそうだ」という現実化の直前の様相を表す表現で、自然現象の場合は、「だす」のほうが適している。
- (5) 表現上のニュアンスとして即興性やエネルギーの爆発等が強調される場合、「だす」のほうが用いられる。

(6) 「～だす」は意志的表現にそぐわない。

(7) 形態上の制限から前項動詞に「出す、始める」が来る場合は、同音反復を避ける。」
 ここでも、断定は避けて「適している」「ふさわしい」「そぐわない」などの語が使われている。類義語の用法定義のむずかしさや限界を示すところと言えるのかもしれない。上記の(4)は「～かける」と類義になる部分である。

後項動詞「～はじめる」と「～だす」についての各氏の分析には、ほぼ共通した点が多いが、行為者の意志に関しては違いがある。すなわち、寺村は、「開始を表わす『～ダス』は意志の有無の別なく使われる」としているのに対して、森田は、『「一出す」は意志性がない」とし、姫野も、「～だす」は意志的表現にそぐわない」としている。

例として、森田は、「自己の意志的判断『そろそろ本を読み出そうか』などとは言わない。『ぼつぼつ時間だ。読み始めるとしようか』、『一始める』を用いる。」と述べている。「などとは言わない」という表現は論理的とは言えないが、こう表現しなければならないほど、論理的に断定できないものなのだとすることを示していると言える。ここにある二つの例の文末の「～そうか」と「～しようか」が気になるが、ここでは、独白と解釈するべきであろう。一方、姫野は、「?早くやりだせ:早くやり始めろ/?今すぐ読みだしたい:今すぐ読み始めたい(後略)」と例をあげ、「～だす」のほうに疑問符を付している。これが「そぐわない」の意であろう。寺村の例「彼ラハ酒を飲ミダシタ」は、分析的に考えると、行為者の意志を表す文ではなく、第三者の行為を客観的に描写した文だと言える。

なお、これは寺村も述べていることだが、「～はじめる」「～だす」共に前項動詞は、普通、継続動詞である。しかし、「複数のものが次々にそれをする」ということを表すという意味では、下の例のように瞬間動詞も使える。

7) 桜の花が散りだした

8) 池の鯉が死にはじめた

4-1-2. 「～はじめる」「～だす」の用法

見てきたように、この二つの後項動詞は同じ「開始」の意味をもつが、その用法に多少の違いがあるので、これらの語を後項動詞に持つそれぞれの複合動詞は、類義語だと言える。各氏の論をふまえた上で、筆者の考察したところを入れて、日本語学習者への説明という視点から、簡潔に記してみる。

「～はじめる」

1. 動作主が意志的に行為を開始するという意味で、動作主が陳述に使う。

「～だす」

1. 第三者が動作主の行為を客観的に陳述するために使うが、動作主の意志とは関わりがない。

- | | |
|--|--|
| <p>2. 行為や作用の開始そのものに視点が
ある場合に使う。</p> <p>3. 前項動詞として、自動詞・他動詞も、
継続動詞も瞬間動詞も使える。</p> | <p>2. 行為や作用の開始を示すが、その行
為や作用が不測・突発的・新たな事
態を示す場合に使う。</p> <p>3. 「～はじめる」と同じだが、前項動
詞が瞬間動詞の場合には、複数のも
のが継続的に行為をするという意味
を持つ。</p> |
|--|--|

以上、簡潔すぎるかもしれないが、この3点をそれぞれに例文を付けて説明すれば、学習者の疑問に答えると同時に、この3点ぐらいなら学習者が覚えることもでき、これらの複合動詞をあまり迷わずに使うこともできると思われる。

なお、「～はじめる」「～だす」が類義として近い意味があるので、まず、これらを対照してきた。考察してきたところによると、「～かける」にも「開始」の意味はあるものの、前二者とは意味にやや開きがある。当初、「～かける」も検討・考察する予定があったが、これは今後の課題とする。

4-2. 「～おえる（おわる）」「～きる」「あげる」

これらは「終了」意味を持つ後項動詞であるが、まず4-1.と同様に『広辞苑』（「A」とする）と『岩波国語辞典』（「B」とする）で原義と、転義の「終了」の意味の部分を見る。「おえる」については「おわる」も参照する。

「A」

1. おえる（他下一）

① それまで続いて（行なって）いたことがすっかり済んで、もしくは時期が来て、またそういうことをしとげて、しまいにする。

②（自動詞的に）おわる。

[おわる（自五）③（「……を——る」の形で他動詞的に）おえる。]

2. きる（自五）

(1) 連結・結合しているものを断つ。離す。

(3) ②（動詞の連用形について）はっきりけじめをつける、終える、果たす、尽くすなどの意を表す。

3. あげる（他下一）

(1) そのもの全体または部分の位地を高くする。

(6) ①（動詞の連用形に付いて）その動作を完了させる意を示す。

(注:「きる」の項では(……について)という表記で「あげる」では(……に付いて)と漢字があるが、いずれも原文のまま。)

「B」

1. おえる (下一他)

その時まで続けていた事を、しとげてやめる、すっかり済んで、または時期が来て、しまいにする。

2. きる [一] (五他)

① 一続きのものを (力を加えて) 離れ離れにする。

② 物事にくぎりをつける。

〈動詞連用形に付いて〉……し終える。「読みきる」。……するのをやめる。

「思いきる」。完全に (すっかり) ……する。「弱りきる」

3. あげる (下一自他)

[一] ものを下から上に移す。

[二] 物事をしとげる。終わりまでする。仕上げる。「原稿を書きあげる」

『広辞苑』は「はじめる」と同様に「おえる」にも、後項動詞としての働きについての記述はない。やはり、「後項動詞1」だからであろう。それはともかく、これらの説明を見るかぎりでは、3語とも「終了」の意味がある。

4-2-1. 「～おえる (おわる)」「～きる」「～あげる」の分析

用法について、4-1. で取り上げた各氏の説を参照してみよう。まず、寺村は「終了」の項¹³⁾で「～オワル、～オエル、～ヤム」を取り上げているが、「～きる」と「～あげる」は「終了」の中には入れず、「程度、密度、強さ、完成など」の項で例をあげているにすぎない。「終了」の項の3語については、次のように記している。

「いずれもある時間続いた事象が終了して、存在しなくなることを表わすが、大まかにいって、～オワル、～オエルは生きものの意志的な動作に、～ヤムは自然現象についてというのが典型的な用法といつてよいようである。～オワルは、(中略) 意志的動詞以外には絶対使えないとはいえないが、例外的といつてよさそうだ。(後略)」

再びここでも、「……いってよいようである。」や「……いってよさそうだ。」が使われていることに注目しておきたい。

この後、寺村は「～ハジメル」の類、「～ツツケル」の類、「～オワル」の類の付く動詞を表にして比較し、こう述べている。

「(前略) 開始を表わす形式に比べると、継続を表わす形式、さらに終了を表わす形式は非常に制限されていることがわかる。これは多くの動詞の場合、完了を表

わすには (中略), ~タという一次的形式で事足り, ことさら終りを強調したければ, 読ンデシマウ, 見テシマウのような二次的形式もある, (後略)

つまり, 要約すると, 『~おわる (おえる)』は, たいてい生きものの意志的な動作について使い, 『~はじめる』に比べて, 使用頻度が高くない。」ということである。

次に, 森田の『基礎日本語』での説を見てみよう。森田は「おわる」「おえる」については, 特に項目はもうけていない。「~だす」の関連語として, 「~はじめる」をとりあげ, その後で「~おわる」「~やむ」に次のように言及している。

「継続する行為や作用の終了には「一終わる／一終える」「一止む」が用いられる。両者の使い分けは, 意志的行為なら「一終わる／一終える」を, 「ようやく原稿を書き終えた」「長編を読み終わる」(中略), 無意志行為, 自然現象は「一止む」を多く用いる。(中略) なお, 意志的行為の場合は「一あげる」と共通する。「着物を縫い終わる／縫い上げる」「原稿を書き終える／書き上げる」。「一終わる／一終える」は“作業の終了”意識が強く, 「一上げる」は“事柄の完了”意識が強い。だから作品としてはまだ完了していない, 「やっと今日, 予定した分だけは書き終えた」は「書き上げた」と言い換えるわけにはいかない。逆に, 完了意識の強い「一人で作り上げた」(中略)「豆をおいしく煮上げた」などは, 「一終わる」で表すことができない。」

この説の「~おえる／~おわる」と「~あげる」を, 意志的行為に用いるということは肯定できる。しかし, 「~あげる」と「~おえる／おわる」の言い換えについては, 例によるのかもしれないが, 再考したいと思う。

森田は, 「一きる」についても, 原義「きる」の項目に続けて, 「分析」としてこう述べている。

「『切る』が“継続する事柄にけりをつけて終結する行為”を表すところから, 他の動詞に付いた場合も, 完全にその事柄を終える, “完了”の意となる。(中略) “全部すっかり……する”意識であるが, この意識はさらに“完全に……し尽くす”『売り切る, 買い切る, 貸し切る, 借り切る, 出し切る』のような“ストックを全部……する”意識へと広がっていく (後略)」

ストックは, 「在庫品, 手持ち品」(『岩波国語辞典』) という意味である。ここでこの語を使うのはどうであろうか。この「~きる」についても, 前述の「~あげる」と共に後述する。

最後に, 姫野の説を見てみよう。姫野には「~おわる／おえる」の項はない。しかし, 『~あげる』の複合動詞¹⁴⁾の中に「4.完了・完成」の項をおき, 次のように記している。

「この類は, 人間の作業活動の終了に伴う『出来上がり品』が予想されるか, あるいは動作の完了そのものに重点が置かれるかによって二つに分けられる。『4. 1.

完成品を伴う作業活動の完了』(前略)『あげる』は完成品や仕上がり品の予想される動詞と結合する。(中略)これに対して『終わる／終える』は、単なる終了を示しており、かなり自由に動作動詞と結合する。(中略)

┌ペンキを塗る	┌糸を織る
└壁を塗る →壁を塗りあげる	└布を織る →布を織りあげる

『4.2. 作業活動の完了』調べあげる 数えあげる 並べあげる (中略)これらの語は、あるひとまとまりの対象物を『調べ／数え／並べ』尽くすという感じを与える。(中略)『勤めあげる』は、職務についてからやめるまでの期間を一つのまとまりと見て、それを全うするという意味になる。(中略)『売りあげる』は、ある目標の額を達成したという意味合いを含む。ふつう『売りあげ』と名詞の形で用いられるが、次のように売りあげ総額の数字とともに用いられることもある。『当店は今期一億円を売りあげた。』(後略)』

また、姫野は、本稿で取り上げている、「終了」を表す「～きる」を「完遂や完了を意味する後項動詞」として、「～ぬく」「～とおす」と共に論じている。特に『～きる』の複合動詞」という項をもうけてもいて、その中で、次のように述べている。

「『～きる』は、本動詞の『切る』の意味で用いられる語彙的複合動詞の場合と、接辞的に統語的複合動詞に大別される。後者は、さらに二つのグループに分かれる。すなわち、継続動詞について行為が完遂することを表すものと、瞬間動詞について極度の状態に達することを表すものである。(後略)」

そして、「～きる」の用法を表¹⁹⁾にまとめている。それによると、「A 語彙的複合動詞」の意味特徴は「切断・終結」,「B 統語的複合動詞」「1」の意味特徴は「完遂」で、「2」のそれは「極度」としている。前項動詞は、いずれの場合も、自動詞でも他動詞でもよいという。

以上のことから考えると、ここで取り上げた三つの後項動詞の中で、「～おえる／おわる」が最も使いやすいということになる。用法は、ほとんどすべての動作動詞に接続する上に、「～はじめる」と同様に動作主の意志的な動作・行為を表す場合に使われるのである。意味は「継続する行為や作用の終了を表す」ということでわかりやすい。とすると、「開始」を表す後項動詞の「～はじめる」を持つ複合動詞と、「終了」を表す後項動詞の「～おえる／おわる」を持つ複合動詞は、単純に反義語として使えると言えるのではないか。

そこで、表題とした「終了」を表す三つの後項動詞の中から「～おえる／おわる」を除いて、「～きる」と「～あげる」について、学習者への疑問に答えるという視点から、考察・検討を試みることにする。

4-2-2. 「～きる」「～あげる」の用法

まず、森田と姫野の「～きる」と「～あげる」の用法分類を列挙し対照する。

森田	姫野
「～きる」	
1. 完全にその事柄を終える“完了”の意「やっと読みきった」	1. 切断の意「鉄棒を焼ききる」
2. 完全に……し尽くすの意 「売りきる」「借りきる」	2. 終結の意「難局を乗りきる」 3. 完遂の意「小説を読みきる」 4. 極度の意「手足が冷えきる」 (4.の前項動詞は瞬間動詞)
「～あげる」	
1. 意志的行為に用いる 「着物を縫いあげる」	1. 完成品を伴う作業活動の完了 「壁を塗りあげる」
2. 事柄の完了意識が強い 「一人で作りあげた」	2. 作業活動の完了そのものに重点 「調べあげる」

以上であるが、実は、森田にも姫野の「～きる1.」に相当する用法についての言及はある。しかし、「きる」の原義の「切り離す」の意であり、本稿の転義を扱うという意図に合わないので取り上げなかった。姫野のものは表の中の一連になっていたもので、順に転記したというわけである。

ここで、姫野の「～きる1.」は別として、他の「～きる」と「～あげる」の用法について、この2語の間の根本的な違いではないかと思われることを述べてみる。これは、姫野が「～あげる」の二つの用法の一つとして、「人間の作業活動の終了に伴う『出来上がり品』が予想される」としていることと関係がある。

実は、古いことだが、1975年ごろに、日本語教育学会の研究分科会¹⁶⁾として、「文法」と「語彙」の会が作られた。「文法」の研究会は大阪で、「語彙」の研究会は京都でもたれることになり、それぞれの会の指導者も決められたが、参加は全く自由であった。筆者は「語彙」の研究会に属することを決め、月一回の研究会に出席していた。会は4～5年続き、得るものの多い研究会であった。この会で複合動詞を取り上げたことがあった。その中で、一番時間をかけて検討し合ったのが、「～きる」と「～あげる」の後項動詞を持つ複合動詞であった。その結果、ほぼ合意した用法は次の通りである。

類義複合動詞の用法一考

「～きる」

1. 動作・行為の終了・完了を表す。
2. 前項動詞の動作が完了した時、その動作の対象であった物は何も残っていないことを表す。

- 例：1) 品物を売りきった。
(何も残っていない)
- 2) この本は読みきった。
(もう読むページがない)
- 3) ペンキを使いきる。
(容器の中にペンキがない)

「～あげる」

1. 動作・行為の終了・完了を表す。
2. 前項動詞の動作が完了した時、その動作の結果として、目に見える形で何かが残っていることを表す。

- 例：1) 100万円売りあげた。
(売り上げ金がある)
- 2) 1日に5冊読みあげた。
(読み終わった本がある)
- 3) ペンキで壁を塗りあげる。
(壁全体に塗ったペンキがある)

上記の「～きる」「～あげる」の2.をふまえて考えられるのは、「飲む」「食べる」などの動詞が表す動作は、その動作が完了した時には、対象となる飲み物や食べ物は消費されてしまっていないものである。従って、「飲みきる」「食べきる」という複合動詞はあっても、「飲みあげる」「食べあげる」は存在しないことになる。事実、これらの語を含む例文は考えられない。

この論で考えると、姫野の「～きる」の1.は別として、2. 3. 4.は「それ以上のことはない」ということを示し、「～あげる」は1. 2.共に「完了」ということのみを述べているが、それぞれ前項動詞の動作の結果が存在するということを示すと言えるのではないか。

以上「～きる」と「～あげる」の用法・使い分けについてここでまとめたことは、「～はじめる」「～だす」と共に、学習者の類義の複合動詞の運用に、多少なりとも役立つのではないかと思う。

5. おわりに

「はじめに」にも書いたように、現代語の日本語動詞の約40%が複合動詞であるというのに、日本語学習者のための教科書には、初級用はもとより中級用にも、複合動詞はあまり記載されていない。ところが、先般、「中級用語彙 —基本4000語—」が玉村(2003)¹⁷⁾によって提示された。この4000語の中から「動詞+動詞」の複合動詞を拾いあげてみたところ、約1%余が含まれていた。この数字を見ると少ないように思われるかもしれないが、従来の中級用教科書にある複合動詞の数を考えると少なくはない。今後、中級の教科書が作成される際には、これを参考にできるだけ多くの複合動詞が取り入れられることを願うものである。

今回、取り上げて考察した類義複合動詞は6語にすぎないが、今後も、学習者の疑問に答えられるように、そして、学習者の日本語運用力を高める助けになるように、少しずつでも、類義の複合動詞の用法に取り組んでいきたいと考えている。

(2003年9月)

注

- 1) 森田良行『語彙とその意味』p. 280 参照
- 2) 田中衛子「複合動詞—日本語学習者の教育項目として—」p. 87 参照
- 3) 玉村文郎編「日本語の語彙・意味(上)」『日本語と日本語教育』第6巻 p. 179 参照
- 4) 寺村秀夫『日本語シンタクスと意味Ⅱ』p. 166 参照
- 5) 西尾実他編『岩波国語辞典』第四版の「おわる」参照
- 6) 森田良行『語彙とその意味』p. 284 参照
- 7) 国立国語研究所『語彙の研究と教育(下)』p. 28 参照
- 8) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』p. 154 参照
- 9) 姫野昌子『複合動詞の構造と意味用法』p. 3 参照
- 10) 同上 p. 4 参照
- 11) 森田良行『基礎日本語』p. 274 参照
- 12) 姫野昌子『複合動詞の構造と意味用法』p. 96 参照
- 13) 寺村秀夫『日本語のシンタクスの意味』p. 178 参照
- 14) 姫野昌子『複合動詞の構造と意味』p. 43 参照
- 15) 同上 p. 175 参照
- 16) 日本語教育学会の「語彙」研究分科会は、玉村文郎氏の指導のもとに、当時の京都日本語学校(現京都日本語教育センター)において、数年間続けられた。
- 17) 玉村文郎「中級用語彙—基本4000語—」『日本語教育』116号 p. 5 参照

参考文献

- (1) 池上嘉彦(2000)『日本語論への招待』講談社
- (2) 影山太郎(1993)『文法と語構成』ひつじ書房
- (3) 影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- (4) 国広哲弥編(1981)「意味と語彙」『日英比較講座』第3巻 大修館書店

類義複合動詞の用法一考

- (5) 国立国語研究所報告82 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版
- (6) 玉村文郎 (1985) 『語彙の研究と教育 (下)』 日本語教育指導参考書13 国立国語研究所
- (7) 玉村文郎 (1989) 「日本語の語彙・意味 (上)」 『講座日本語と日本語教育』 第6巻 明治書院
- (8) 玉村文郎 (2003) 「中級用語彙 —基本4000語—」 『日本語教育』 116号 日本語教育学会
- (9) 田中衛子 (1996) 「複合動詞 —日本語学習者の教育項目として—」 『名古屋大学日本語・日本文化論集』 第4号 名古屋大学留学生センター
- (10) 寺田裕子 (2001) 「日本語の二類の複合動詞の習得」 『日本語教育』 109号 日本語教育学会
- (11) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』 くろしお出版
- (12) 新美和昭他 (1987) 『複合動詞』 外国人のための日本語例文・問題シリーズ4 荒竹出版
- (13) 日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育事典』 大修館書店
- (14) 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房
- (15) 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 国立国語研究所報告43 秀英出版
- (16) 森田良行 (1977) 『基礎日本語』 角川小辞典-7 角川書店
- (17) 森田良行 (1991) 『語彙とその意味』 アルク
- (18) 阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』 角川書店
- (19) 佐藤喜代治編 (1982) 「日本語の語彙の特色」 『講座日本語の語彙』 第2巻 明治書院
- (20) 佐藤喜代治編 (1982) 「現代の語彙」 『講座日本語の語彙』 第7巻 明治書院
- (21) 鈴木一彦他編 (1972) 「動詞」 『品詞別日本文法講座』 3 明治書院
- (22) 関一雄 (1977) 『国語複合動詞の研究』 笠間書院
- (23) Y. Tagashira J. Hoff (1986) 『日本語複合動詞ハンドブック』 The Hokuseido Press